

井原庄・莊原庄を訪ねて



3. 狩野常信筆「山寺図(模本)」 (東京国立博物館)

雪舟の「山寺図」を
狩野常信が写した作品
で、岐阜の楊岐庵を描
いたものと言われてい
ますが、重玄寺のある
芳井町西吉井の風景に
大変よく似ています。

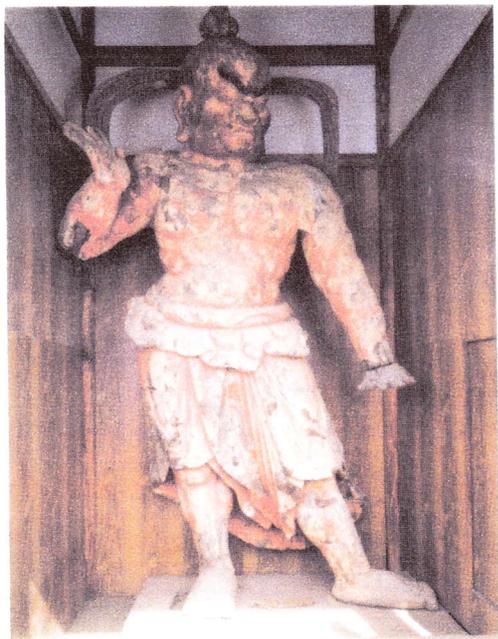
平成25年9月15日

もく ぞう こん ごう りき し ぞう
木造金剛力士像

井原市笹賀町 金敷寺 金鳴寺
平成元年4月4日指定

県指定

彫刻



阿形像（右）は、像高352.0cm、^{うんぎょう} 吽形像（左）は、像高360.0cm、どちらも松材の寄木造り。阿形像は、頭部を前中後3材はぎにして体部に挿し、体部は首の付け根から裳裾前面下端に至る前面材と、左右2材はぎの背面材を寄せ、左体側部に前中後の3材、右体側部に前後2材を寄せる。左脚は膝から足首まではぎ、右足は裳の右側上部から足首までの1材を右体側部前部材の外側にはぎ足し、両足首以下も横はぎにするが、この足首以下の材は後補である。吽形も頭部は前中後3材はぎ、体部は前面縦1材に左体側部前後2材、背面部左中右3材を寄せ、左足は、左体側前部材の外側に、裳の外側から足首に至る1材を寄せ、右脚は膝から足首までの1材を寄せ、両足とも足首以下を横はぎに寄せるが、阿形と同様後補になっている。両像も足首以下の足先のほか、表面の朱色の彩色、左右の裳裾部、^{てんい}天衣遊離部、両乳首、瞳に嵌入された銅版などがあり、手指の欠失も目立つ。しかし、全体的に保存状態もよく、形、制作技法などから平安時代末期の作と推定される。すなわち、下半身に対して上半身の過大な、茫洋としたフォルム、^{ふんぬ}憤怒の面相も何かユーモラスな鷹揚さを表し、突っ張った二の腕に、細めに天衣が蛇のように螺旋状にからまっているところなど、いずれも平安時代の、特に畿内地方で製作された金剛力士像にのみ見出される特色である。平安時代の金剛力士像は、この像を含めて全国に6例しかなく、岡山県下に残る平安仏の中で最大の巨像である。

池之坊西之坊 仁王坊 金庫坊 新之坊 上之坊 合計 拾五石とある。

ろく おん いん でん せき とう ば
鹿苑院殿石塔婆

井原市井原町 善福寺
昭和32年7月12日指定

市指定

石造美術



この石塔婆は、宝篋印塔で、総高74.0cm、最上の相輪は欠いている。粒状石灰岩製のため、各部の角が風化、摩耗しているが、笠以下はそろっている。また、隅飾突起が比較的すみかざり小さめで、基礎側面を無地に造るところは、粒状石灰岩製の宝篋印塔の特徴を備えている。基礎正面に、以下の刻銘がある。「鹿苑院殿 准三后 大相国天山大禪定門台靈 応永十五年 五月初六日」この刻銘によれば、この宝篋印塔は、応永15年(1408)に、鹿苑院殿こと足利義満を供養するために立てられたということがわかる。善福寺は、南北朝の騒乱時に足利尊氏が九州に下る際母親をあずけた屋敷跡を足利義満が祈願所として、応永3年(1396)に創建したと伝えられ、その関係でこの足利義満の供養塔が造られたのではないかと想像される。在銘の粒状石灰岩製宝篋印塔としては県内でも古例といえ、室町時代の基準作となる貴重な資料といえる。

参考文献

岡山県教育委員会『岡山県社寺所有資料調査報告書5』岡山県教育委員会
平成7年3月

巻頭マップ⑤ 別冊 井原市文化財マップ E-9

くろ き こう さつ ば
黒木の高札場

井原市美星町黒木 井原市
平成17年3月16日指定

市指定

史跡



天保三年(1832)備中国村々様子大概書
屋田村、板倉越中守領 御高札場壱ヶ所、
辻堂拾五ヶ所。

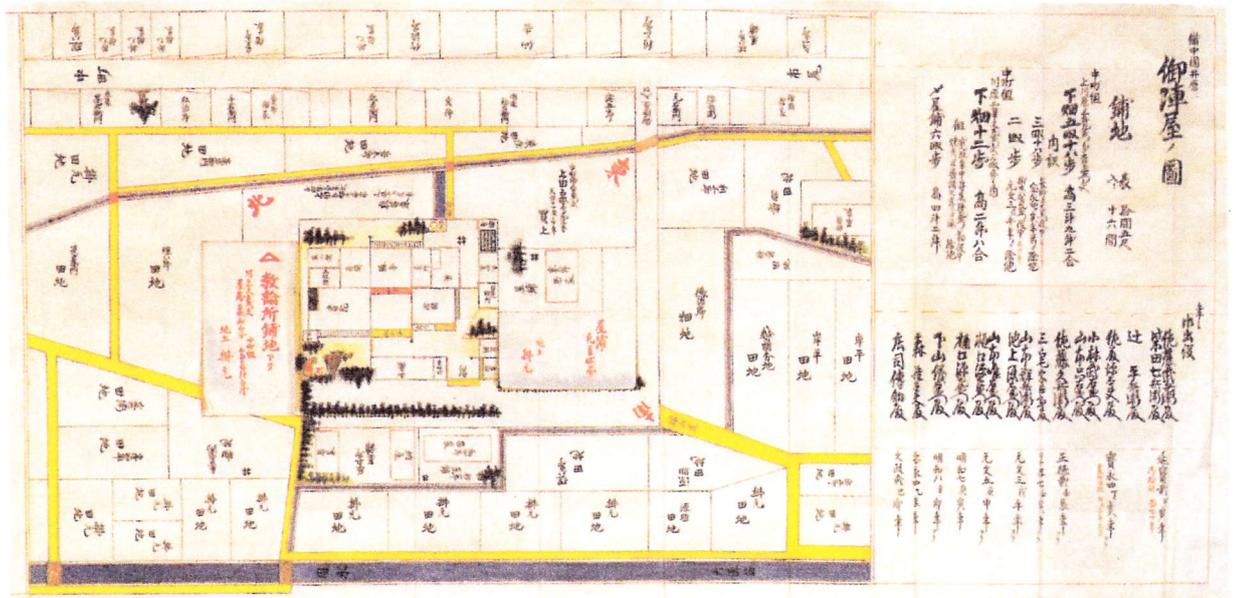
法度、掟書などをするした高札を掲げる場所を高札場といい、一般に高札は、交通の多い市場や辻などに掲げ、庶民の間に法令を徹底させることを目的とした。中世末期から起り江戸時代にもっとも盛んとなり、明治3年(1870)に廃止された。この高札場のあるところの字は札場めさという。江戸時代後期の建設と推定されるが、年月日不詳。柵の中に柱を立て、横棧を渡し、雨覆の屋根を設けている。間口1.37m 奥行0.93mを測る。大札は一村一札、切支丹、大附、強訴、毒薬、仙金銀札、人馬賃銭定、御旨書札等が張り出された。

巻頭マップ⑥ 別冊 井原市文化財マップ H-7



2018/05/29

頂見部跡浪形岩。浪形石は、輪田塚、宇佐大塚、王墓山、金子石塔塚、江崎等の古墳の石棺に使われている。



現在の井原小学校々庭に在った。

1 備中国井原御陣屋ノ図 天保十四年八月
岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫

なみがたいわ
浪形岩井原市野上町 千手院
昭和27年8月5日指定

県指定

天然記念物



標高約 260m、千手院の庭に露出した貝殻石灰岩で、岩肌が長い年月の間に地下水で溶かされ、そのあとが浪に洗われたあとのように見えるところから浪形岩の名称がつけられた。ほぼ水平な地層で、礫質岩からなる下部層、砂質岩からなる中部層、多量の貝化石を含む上部層の3層よりなり、基盤の粘板岩、花崗岩、流紋岩類を不整合に覆っている。この石灰岩は、カキ、ハネガイ、ベンケイガイなどの貝類の化石から形成されていて、まれにサメの歯、ウニの化石も見られる。時代は、中新世（約 2000 万年前）で、当時このあたりが浅い海であったことがわかる。その後、この土地は、造陸運動を経て現在の位置に隆起した。幕末に、千手院の住職証算和尚が庭をつくる時に浪形岩を掘り出したことにより、現在、すばらしい景観を織りなしている。この浪形岩は、古墳時代の後期、こうもり塚古墳（総社市）、牟佐大塚古墳（岡山市）、江崎古墳（総社市）など吉備地方の首長墓の石棺として使用されている。

参考文献 岡山県教育委員会『岡山県の文化財（三）』岡山県教育委員会 昭和 57 年 3 月

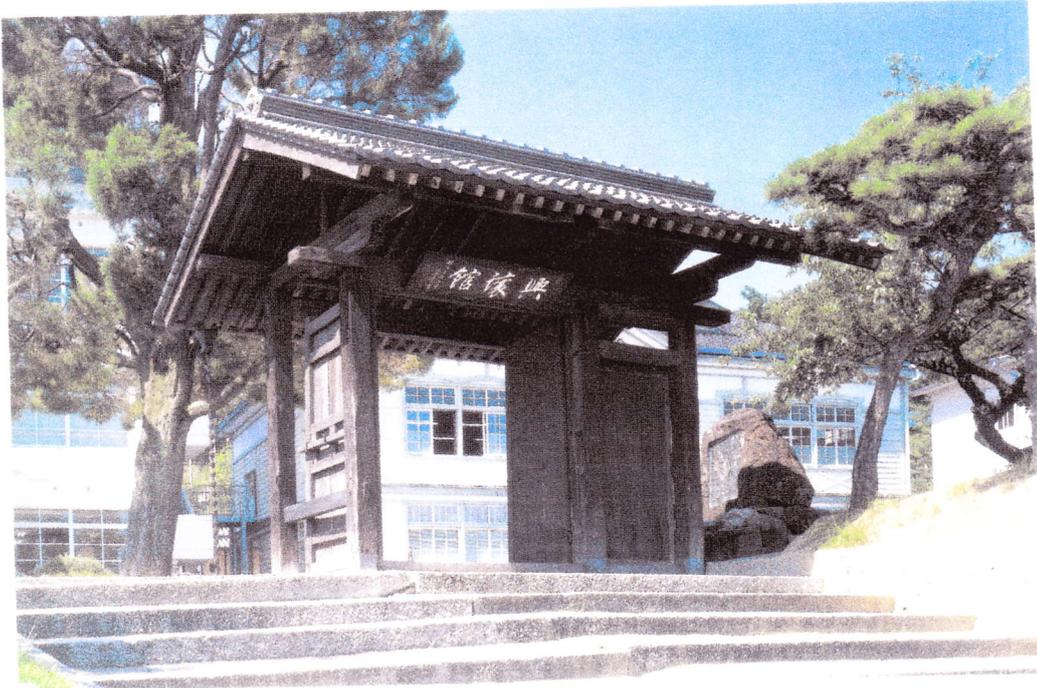
こうじょうかん
興讓館

(講堂、門、紅梅)

井原市西江原町 興讓館
昭和29年3月5日指定

県指定

史跡



興讓館(講堂、門、紅梅)

興讓館は、庶民の子弟の教育を目的として、当地の領主一橋家の代官友山勝治が西江原領内に、嘉永6年(1853)、漢学者阪谷朗廬さかたにらうりゆうを招いて創立した郷校である。校名の由来は、四書の『大学』に、「一家仁なれば一国仁に興り、一家讓なれば一国讓に興る」からとられた。創設当時の姿をとどめているのは講堂と校門、そして阪谷朗廬お手植えと伝えられる紅梅である。講堂(書齋付)は、嘉永6年(1853)に建てられた。元は藁葺きであったものを、安政6年(1859)に現在のような瓦葺きとなった。建坪25.5坪(書齋は4.5坪)本瓦葺き平屋建で、平成7・8年に保存修理を行い、現在は資料を展示し公開している。校門は棧瓦葺きで、初代館長と親交のあった渋沢栄一しぶさくえいいちの揮毫した扁額がかかっている。また、紅梅は、樹齢約150年で、根元付近より東西に分かれ、毎年春には美しい花を咲かせている。阪谷朗廬は、井原市美星町に生まれた漢学者で、江戸で学び、井原市芳井町あうけいしやまくで桜溪塾を開いていた。その後、興讓館に招かれ、領内の子弟の教育を行った。朗廬の名声は各地に広がり、遠くは九州地方からの入門者もあった。その後、広島藩、明治政府に招かれ要職を務めるとともに、森有礼、福沢諭吉の主催する明六社に漢学者としては唯一参加した。

参考文献

山下敏謙『興讓館120年史』興讓館 昭和48年10月
岡山教育委員会『岡山県の文化財(三)』岡山県教育委員会 昭和57年3月

巻頭マップ④ 別冊 井原市文化財マップ F-9

(1) 古代

◆倭名類聚抄（承平四年 904）頃成立

小田郡 實成 拜慈 草壁 小田 甲務 魚緒 驛家 出部郷
後月郡 莊原 縣主 出部 足次 驛家郷

◆清水正健編 莊園資料

小田郡 三成 草壁 驛里 走出 後月郡 莊原 縣主保

莊原＝東・西江原町、青野町、野上町

足次＝井原町、稗原町

縣主＝木之子町、門田町、西方町

出部＝笹賀町上・下出部町七日市町

驛家＝高屋町

小田郡出部＝大江町

◆日本書紀 應神二十二年の秋九月の丙戌（六日）条

「因りて吉備国を割いて封其子等」

◆先代旧事本紀卷第十国造本紀 吉備穴国造

「纏向日代朝御世（景行天皇）和邇臣同祖彦訓眼命孫八千足尼定賜国造」

◆日本書紀 安閑二年五月甲寅条

「備後国に後城屯倉 多禰屯倉 来履屯倉 葉稚屯倉 河音屯倉を置く」

◆日本書紀 天武八年（679）三月己丑条

「吉備大宰石川王病之薨於吉備 天皇聞大哀 則降大恩 云々」

◆続日本紀 文武四年（700）十月己未条

「上毛野朝臣小足為吉備掎領（他に周防 筑紫）」

◆続日本紀

文武元年（以下年号）・慶雲元年・天平宝字四年・同七年・同八年・延暦九年 等
「備中国賑給を受ける」

◆続日本紀 天平十二年（740）

「藤原広嗣之乱鎮圧の為 五道（東海 東山 山陰 山陽 南海）より兵士老萬七千人を徴発する」

◆日本三代實録 貞觀元年（859）二月七日条

「遺典薬頭從五位上出雲朝臣岑嗣於備中国採石鍾乳（倭名類聚抄に 石鍾乳備中国英賀郡に出ず）」 現北房町備中鍾乳穴

- ◆延喜式卷二十八 兵部省（延長五年 927 成立）
「諸国驛傳馬 山陽道備中国驛馬 津見 河辺 小田 後月 各廿疋 備後国
安那 品治 者度 各廿疋」

- ◆日本三代實録 元慶元年（877）十二月二十一日条
「備中国が大嘗會の主基国となり、当年の庸米を免除される」

- ◆三善清行著 藤原保則伝 保則の善政

- ◆延喜式卷十 式内社備中国十八座の内
「後月郡一座 足次山神社 小田郡三座 在田神社 鵜江神社 神島神社」

- ◆新猿楽記 四郎君条 康平元年（1058）
「諸国土産 備中は刀 備後は塩」

- ◆輔仁本草 延暦十八年（918）備中国産出薬物（続群書類聚 卷三十之下）
「石胆 石鍾乳 朴消 白石 子 孔公薛 石膏」

- ◆延喜式卷三十七典薬寮
「備中国は四十七種の薬を納める」

- ◆康頼本草（永観元年 983）
「石鍾乳 白石英 殷薛子 石膏」

（2）中世

- ◆本朝世紀卷四
「備前 備中 備後国等に純友追捕の官符を下す(天慶二年 939 十二月二十一日条)」

- ◆貞信公記
「西國兵船多来 備中國逃散之状（天慶三年正月二十日条）」

- ◆吏部王記
「是日備前 備中 淡路等飛駈至 備前使申云 賊二艘純友等也從響奈多捨舟脱遁
(天慶四年六月十一日条)」

◆日本紀略

「被定可造薬師寺之国々 大和伊賀美濃播磨備中備後安芸周防讃岐伊予十ヶ国也(天延元年 973 五月三日条)」

◆類聚符宣抄卷一

「中宮職 戸座贄を貢進させる」(天曆三年 949 九月十一日条)

「大皇太后職 〃 〃」(長和二年 1013 十二月七日)

◆兵範記

「内裏後涼殿造営を割り充てられる(保元二年 1157 三月二十六日)」

「今日相撲召合せ 七番 左藤井季助 参河國 保元三年六月二十七日
右中原弘高 勝 備中國」

◆玉葉

「伝聞義仲隋兵之中 少々超備前國 而彼國並備中國人等起勢 皆悉伐取了
(寿永二年 1183 十月十七日条)」

◆吾妻鏡第三

「十八日丁丑 播磨美作備前備中備後已上五ヶ国 景時実平等遺専使可令守護之由
云々(寿永三年二月十八日条)」

「廿五日甲寅 土肥次郎実平為御使於備中國行釐務(元暦元年 1184 三月廿五日条)」

◆後鳥羽院宸記

「備中國々領 修明門女院知行国也(建保二年 1214)」

◆後堀河天皇宣旨

「尊守親王家門跡領 備中國式箇所 草壁庄県主保為(寛喜三年 1231)」

◆光厳上皇院宣写

「尊勝寺法華堂領備中國県主保事 与当堂禅衆[※]等 和与中分之由 歴應三年 1340」

※禅衆=青蓮院の事

◆地頭代道性年貢送状写

「送進県主保領家御年貢事(歴應四年)」

◆室町幕府引付頭人奉書写(貞和五年 1349)

「備中國県主保領家職事 地頭濫妨云々」

◆備中國県主保領家五辻中將家御代官政信申領家職事

「那須五郎相共莅彼所 同書貞和六年」

- ◆三吉鼓家文書 岩松頼宥感状 正平六年 1351)
「三吉覚弁 莊原高越城 延福寺合戦での軍忠を褒められる」
- ◆福原家文書
「上相五郎 宮平太郎（盛重）等が莊原城へ攻め寄せるとの風聞」
- ◆尊勝寺法花堂納所芳順和与状 貞治五年 1366
「県主保年貢 尊勝寺法花堂と地頭との間で和与」
- ◆県主保和与状写 応安三年 1370
「青蓮院入道親王家御領備中國県主保雑掌権律師源暁与地頭齊藤五郎右衛門尉康行同筑前五郎基繁」 同文が室町幕府御教書に載る
- ◆観勝寺寺領目録 大覚寺文書 応安七年
「堀川院御領備中國県主保 備後国奴苛保等以上五十所者後光嚴院御寄付也」
- ◆山内家文書 応永元年 1394
「備後國恵蘇郡三上郡両郡司職事」
- ◆山内首藤家文書 応永元年
「備中國井原庄事 通忠（山内）相伝之領地也 嫡子熙通讓渡 下 山内下野守通忠給之 備後国恵蘇郡内上村事 備中國井原庄事 右依致忠節宛行之状如件」
- ◆建内記 嘉吉元年 1441
「足利直冬の孫義尊 備中より播磨へ逃げる途中、備中守護に討たれる 義尊伊原御所と称し諸国へ廻文を發する（同書同年）」
- ◆御郷記 嘉吉二年
「義尊畠山持国家人に討たれる」
- ◆乃美文書 永禄十二年 1569
「藤井事 山野吉井之間一城取付候亮 二三日以前より至高屋要害被打出 国司元武 神辺の陣での忠義を褒められる」
- ◆萩藩閥閥録 元龜二年 1571
「栗屋就方 小田高越辺に軍勢を控える様進言する」
「小早川隆景 湯浅將宗に小田高越城へ出陣を命ず 天正五年（1577）」

(3) 近世

近世約二百七十年の支配の様子を概観すると、文政十年（1827）が大きな境になっている。それ以前の二百三十年間は基本的には幕府領の時代、後の四十年間は一橋領である。幕府領時代には元和・寛政年間、成羽・松山、元禄年間は福山、元禄・宝永年間には西江原藩領の村々と幕府領の村々が混在したが、概ね短期間であった。それに対し旗本領は長かった。井原村に陣屋を構えた池田氏と木之子村を幕府領を相給の形で支配した高山氏は維新まで続いた。（井原市史）

近世の村の概況を知る資料として

- 一橋領 一橋徳川家文書（備中国村々様子大概書 天保三年 1832）
小田郡 29 カ村、後月郡 26 カ村、他に播磨、越後、摂津、武蔵、下野、和泉、下総などに領地があった。備中では上房郡にも 9 カ村、また笠岡市の一部にも領地があった。
西草加部庄 奥山田村 麻屋庄 川面村 本掘村 浅海村 鷓郷 内田村 高階村 宇角村 平宇角村 三カ原村 三谷村 大倉村 田上庄 羽無村 麦草村 星田村 甲怒庄 甲怒村 走出村 新賀村 魚渚郷陶山庄 吉田村 今立村 小平井村 大戸村 大河村 有田村 入田村 坂村 上稲木村 下稲木村 岩倉村 瀧山郷 大江村 江原庄 西江原庄（御陣屋元） 寺戸村 東江原村 神代村 山野上村 名越村 花瀧村 青野村 北山村 梟郷 木之子村 門田村 西方村 出部之郷 上出部村 出部之庄 上出部村之内七日市駅 下出部村 足次之郷 笹賀村 井原庄 梶江村 築瀬村 吉井村 与井村 天神山村 河合之庄 川相村 下鳴村 山村 池谷村 三原庄 東三原村 西三原村
- 麻田藩 備中国後月郡稗原村明細帳_下（享保六年 1721）七月（麻田蕩領） 稗原村明細帳（正徳元年 1711）七月 西田五郎家文書
- 幕府領 敷名村明細帳（天保四年 1833）四月 猪原寅男家文書 高屋村明細帳（天保十四年 1843）正月 井原市教育委員会
- 福山藩 高屋村分郷請証文（嘉永六年 1853）八月 原田俊雄家文書

井原	慶長 5 年 (1600)	慶長 19 年 (1614)	寛永 19 年 (1642)		
	幕府領 小堀家	池田家	池田家 (十五・十六 年は山崎家)		

稗原	慶長 5 年 (1600)	慶長 19 年 (1614)	寛永 19 年 (1642)		
	幕府領 小堀家	池田家	青木家		

上出郡	慶長 5 年 (1600)	元和 3 年 (1617)	寛永 19 年 (1642)	元禄 10 年 (1697)	宝永 3 年 (1706)
	幕府領 小堀家	池田家	幕府領 (寛永 15-16 年は山崎家)	森家	幕府領
	文化 10 年 (1813)	文政 10 年 (1827)			
	幕府領 (脇坂家預)	一橋家			

笹賀・敷名	慶長 5 年 (1600)	慶長 19 年 (1614)	元禄 10 年 (1697)	宝永 3 年 (1706)	文化 10 年 (1813)
	幕府領 (小堀家)	池田家	森家	幕府領	幕府領 (脇坂家預)
	文政 10 年 (1827)				
	一橋家				

青野・北山	慶長 5 年 (1600)	慶長 19 年 (1614)	寛永 15-16 (1638-9)	元禄 10 年 (1697)	宝永 3 年 (1706)
	幕府領 (小堀家)	池田家	山崎家	森家	森家
	文化 10 年 (1813)	文政 10 年 (1827)			
	森家	一橋家			

山野上	延宝 5 年 (1677)	元禄 10 年 (1697)			
	幕府領 (小堀家)	関家			

西江原・ 寺戸	慶長 5 年 (1600)	元和 3 年 (1617)	元禄 10 年 (1697)	文化 10 年 (1813)	文政 10 年 (1827)
	幕府領 (小堀家)	池田家	森家	幕府領 脇坂家領	一橋家

東江原・ 神代	慶長 5 年 (1600)	元和元年 (1615)	元和 2 年 (1616)	寛永 15 年 (1638)	寛永 16 年 (1639)
	幕府領 (小堀家)	幕府領 (小堀家)	山崎家	幕府領	水谷家
	寛永 19 年 (1642)	元禄 10 年 (1697)	宝永 3 年 (1706)	文化 10 年 (1813)	文政 10 年 (1827)
	幕府領	森家	幕府領	幕府領 脇坂家領	一橋家

西方	慶長 5 年 (1600)	慶長 6 年 (1601)	慶長 9 年 (1604)	元和元年 (1615)	元和 3 年 (1617)
	幕府領 (小堀家)	花房志摩守	岡越前守	幕府領 (小堀家)	山崎家
	寛永 15 年 (1638)	寛永 16 年 (1639)	寛永 19 年 (1642)	貞享元年 (1684)	元禄 10 年 (1697)
	幕府領	水谷家	幕府領	久世家	森家

西方	宝永 7 年 (1710)	享保 6 年 (1721)	文政 11 年 (1828)		
	内藤家	幕府領	一橋家		

門田	慶長 5 年 (1600)	元和 3 年 (1617)	寛永 15 年 (1638)	寛永 16 年 (1639)	寛永 19 年 (1642)
	幕府領 (小堀家)	山崎家	幕府領	水谷家	幕府領
	貞享元年 (1684)	元禄 10 年 (1697)	宝永 7 年 (1710)	享保 6 年 (1721)	文化 10 年 (1813)
	久世家	森家	内藤家	幕府領	幕府領 脇坂家預
	文政 11 年 (1828)				
	一橋家				

木 之 子	慶長 5 年 (1600)	慶長 9 年 (1604)	寛永 5 年 (1628)	寛永 8 年 (1631)	寛永 15 年 (1638)
	幕府領 (小堀家)	高山家 植村監物	高山家 池田豊後守	高山家 幕府領	高山家 幕府領 幕府領

木之子	寛永 16 年 (1639)	寛永 19 年 (1642)	宝永 7 年 (1710)	享保 6 年 (1721)	文化 10 年 (1813)
	水谷家	幕府領	内藤家	幕府領	幕府領 脇坂家預
	文政 10 年 (1827)				
	一橋家				

岩倉	慶長 5 年 (1600)	慶長 7 年 (1602)	慶長 14 年 (1609)	元和 3 年 (1617)	寛永 19 年 (1642)
	幕府領 (小堀家)	糟谷家	幕府領 (小堀家)	池田家	幕府領
	天和 3 年 (1683)	貞享 3 年 (1686)	宝永 7 年 (1710)	享保 5 年 (1720)	文化 9 年 (1812)
	久世家	幕府領	内藤家	幕府領	幕府領 脇坂家預
	文政 10 年 (1827)				
	一橋家				

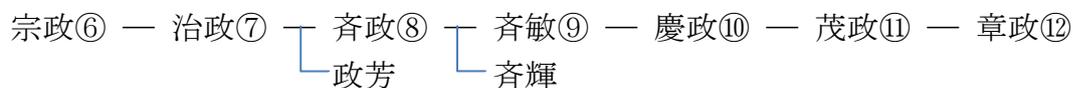
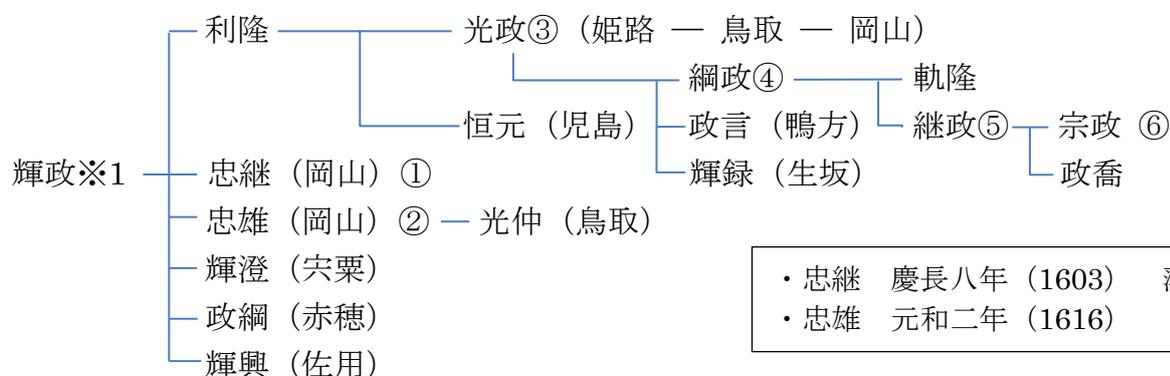
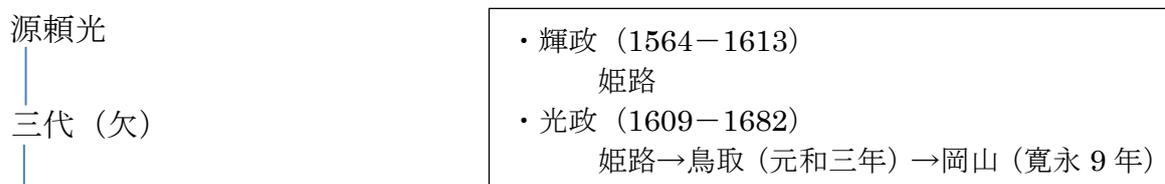
上稲木・ 下稲木	慶長 5 年 (1600)	元和 5 年 (1619)	元禄 11 年 (1698)	文化 9 年 (1812)	文政 10 年 (1827)
	幕府領 (小堀家)	水野家	幕府領	幕府領 脇坂家預	一橋家

大江	慶長 5 年 (1600)	慶長 9 年 (1604)	元和 5 年 (1619)	元禄 11 年 (1698)	文化 9 年 (1812)
	幕府領 (小堀家)	花房志摩守	水野家	幕府領	幕府領 脇坂家預
	文政 10 年 (1827)				
	一橋家				

高屋	慶長 5 年 (1600)	元和 5 年 (1619)	元禄 11 年 (1698)	文化 9 年 (1812)	天保 11 年 (1840)
	福島家	水野家	幕府領	幕府領 脇坂家預	幕府領
	嘉永 6 年 (1853)	安政 6 年 (1859)			
	幕府領 阿部家*	幕府領	* 阿部正弘は嘉永 5 年、1 万石加増となり、翌年、高屋村 1,400 石のうち、602 石を賜る		

□池田家系図（寛政重修諸家譜）

美濃国池田荘本郷村（一説ニ可児村）を本領



□備中松山藩

小堀新助（代官） — （イ）池田長幸 — 長常

水谷勝隆 — 勝宗 — 勝美 — 勝晴

安藤重博 — 信友

石川総慶

松倉勝澄 — 勝武 — 勝従 — 勝政 — 勝暎 — 勝職 — 勝静

- ・慶政は奥平昌高の十男
 - ・茂政は徳川斉昭の九男
 - ・章政は相良頼之の次男
 - ・長吉 元和三年 絶家
 - ・長常 寛永十八年 絶家

□井原池田家

池田長信^{※1} — (略) — 長休 — 長発^{ながおき}^{※2}

※1 長信 池田長幸 (イ) の子

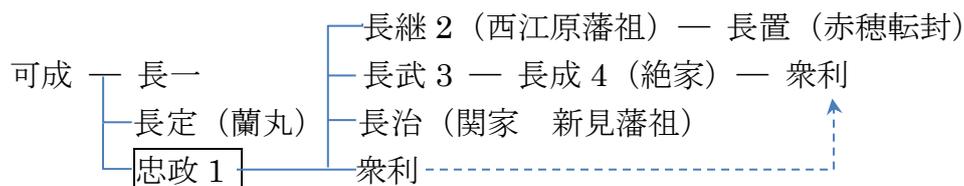
※2 長発 火盜改・京都町奉行・目付 等 墓は岡山市平井山

文久三年 (1863) 外国奉行。フランス士官殺害事件 (井土ガ谷事件) の收拾を図るため渡仏し、ナポレオン三世に拝謁、事件の謝罪と横浜鎖港の交渉に当たった。帰国後、鎖国の無意味を幕府に進言し、罷免される。のち、許されて勝海舟と共に軍艦奉行となる。

□那須氏

治承・寿永 (1177-1183) の頃は資高の子として 11 名の名前が載る。11 番目が余一資隆。その他宗高、助宗、宗高等、いろいろに書く。下野国那須郷が本貫の地。屋島合戦の時、扇の的を射落とし荘原庄を与えられた。系図では始祖を藤原鎌足とする。(続群書類従)

□森家西江原藩



□津山藩

二代長継は延宝二年 (1674) 致仕、弟長武が三代となる。長成が 16 才になったので家督を譲り、別家を立てた。長成は元禄十年 (1697) 危篤、衆利を養子とするが、将軍御目見得に出府の途次、発狂、絶家となる。この時、福山藩は城受取に行く。

然し長継は存命中であって、後月・哲多・窪屋・浅口・小田郡内で二万石を与えられ、西江原に陣屋を置く。元禄十一年 (1698) 没。長男長置が継ぐも宝永三年 (1706) 赤穂に転封。西江原藩は廃藩。文政十一年 (1728) 一橋領で代官所が置かれた。

□高山氏

相模国土肥氏未。裳掛を給したが、盛聡の時、高山将監盛英に養育され、高山氏を称す。(岡山県通史)

□青木氏

摂津麻田藩。元和元年（1615）、摂津国豊原郡、備中国後月・小田・浅口三郡中、伊予国の内一万二千石。豊中市に陣屋。初代は一重で一万二千石
 一典 一都 見典 一新 一貫 一貞 重竜 一興 一感 重義

□花房志摩守・岡越前守

元宇喜多家重臣で宇喜多家内紛で家康預りとなっていたが、のち当地に領地をも
 らった。花房志摩守正成 岡越前守家俊

○寛永十五・十六年（1538-39）頃成立の「備中国絵図」には井原・上出部・下出部・
 敷名・寺戸・青野・北山・山野上 山崎甲斐守とある。

○笹賀村は幕府領と花房志摩守の相給。西江原村は池田氏と山崎氏の相給。

足利尊氏 — 直冬 — 冬氏 — 宝山乾珍（1394-1442）天龍寺・相国寺僧録司
 — 義詮 — 義満 — 義尊（井原御所と称す）
 — 義持（千畝周竹を開山として重玄寺を開く）

□成羽藩

山崎家治（因幡若桜から）—— 肥後国富岡へ —— 水谷勝隆（常陸国下館から）——
 元和三年（1617）七月 寛永十五年（1638）四月 寛永十六年（1639）六月

— 備中松山へ ————— 天 領 ————— 山崎豊治 —— 九代略 ——
 寛永十九年（1642）七月 万治元年（1658）まで 家治の子

—— 治正 —— 治祇 （川上郡志）
 治祇は治正の子

足利尊氏は建武三年（1336）新田義貞との戦いに敗れ、二月十二日兵庫泊から九州
 に降る。この際、母親を預けた。足利義満は康応元年（1389）巖島に詣でている。
 この際、善福寺に立ち寄ったか。

 **備陽史探訪の会**

【事務局】

〒720-0824 広島県福山市多治米町5-19-8

TEL 084-953-6157

E-mail info@bingo-history.net

公式サイト

<http://bingo-history.net>